国立大学法人千葉大学学長の業績評価結果について

学　　長：徳　久　剛　史
任　　期：平成２６年４月１日～平成２９年３月３１日

評価期間：平成２６年４月１日～平成２９年３月３１日

【評価結果】

国立大学法人千葉大学学長選考会議は、国立大学法人千葉大学学長の業績評価に関する要項に基づき、平成２６年度から平成２８年度における徳久剛史学長の業績評価を実施しました。

業績調書に記載された基本方針、大学運営、教育、研究、社会連携・社会貢献、国際化、附属病院、附属学校及びその他の各項目に係る業績について、５月１８日開催の学長選考会議において確認するとともに６月１２日まで書面による審査を実施し、６月２６日開催の学長選考会議において、徳久剛史学長へのヒアリング及び監事との意見交換を踏まえて審査した結果、非常に優れているとの結論に至りました。

平成２９年６月２６日

国立大学法人千葉大学
学　長　選　考　会　議

業績調書に係る審査結果（総表）

評価項目	評価
1　基本方針	**4.4**
2　大学運営に関する事項	**4.4**
3　教育に関する事項	**4.1**
4　研究に関する事項	**4.2**
5　社会連携・社会貢献に関する事項	**3.9**
6　国際化に関する事項	**4.6**
7　附属病院に関する事項	**4.3**
8　附属学校に関する事項	**3.5**
9　その他	**3.7**

※評価は，各委員による評価の平均値を示す。

【評価及び評価内容】

評価	評価内容
5	期待を大幅に上回る業績をあげている／非常に優れている
4	期待を上回る業績をあげている／優れている
3	期待どおりの業績をあげている／良好である
2	期待する業績を下回っている／やや努力を要する
1	期待する業績を大幅に下回っている／努力を要する

【特筆すべき事項】p2～p6

○　徳久学長の業績評価については、同学長より御提出のあった「業績調書」（平 26.4-29.3）を詳しく拝読、いずれの「評価項目」においても平成 29 年度に及んで極めて優れた実績を挙げられたものと判断した。御就任後三年余、その間学長が議長としてまさに采配を振られた累次の経営協議会にほぼ皆勤した者として、これらの実績のひとつひとつが、全学挙げての御尽瘁のもたらしたものとして重々認識、学長そして「Vision Chiba University」にいうSynergy（協働体制）をもって学長を助けてこられたすべての大学教職員の方々に深い敬意を表するものである。

経営協議会において議長は積極的に意見、助言、批判、心配事の披露を求め、関係部局によって常に周到に準備された資料を完全に掌握、会議を指導、大学運営の仔細に及ぶ透明性、ガヴァナンスの確保に尽力された。直近ではAI 研究、寄付金文化の育成等についての実り豊かな討議が記憶に残る。

平成 28 年度､29 年度とつづけて国立大学一般入試志願者数全国一という偉業について。これには､いま千葉大学が｢Vision Chiba University 2015-2021｣更に「徳久プラン」と呼びあゆんでいる姿に若者達の心に深くふれるところがあるからではないか。この姿の一面は、既に構築されている学部横断型教育プログラム「国際日本学｣､｢国際教養学部｣の創設或いは「薫風寮」の竣工が象徴する国際化へのコミットメントである。内外ともに道筋をみせない、折々無気味ですらある所謂グローバリゼーションのもたらす多くの若者達にとってのぼんやりとした不安感。これへの理解、これの克服の努力が千葉大学のあゆみの姿に感じられる。学生海外派遣数平成 23 年度以降全国国立大学中四年連続一位、6 ターム導入による学生の留学や、教職・研究者の国際交流の活性化、ヴォランティア活動等の体験の促進、科目選択の拡大、一つ一つのコミットメントの証であり、姿である。

更に本年度の入学式においては、徳久学長の洵に行き届いた訓示、そして来賓祝辞は、女性実業家であり経営協議会委員でもあるエリザベス正宗氏が述べられた。日本語を母国語としない外国人が実にメリハリのある日本語で、新入生に対し、「若者達よ、世界にむかって大志をいだけ」と諄々と説いたのである。これ程に外国語を学ぶべきことへの親しみと魅力を覚えさせる舞台はあまりない。新入生にとって、いや列席者一同にとり忘れ難い体験であったと思う。この構想と実行に敬意を表したい。

千葉大学グローバル・プロミネント研究基幹石原安野准教授の本年度「猿橋賞」受賞は、職場としての千葉大学の質の高さとその魅力とを示すものとして祝意を表する。

○　重点支援③としては、研究、論文提出数等に大きく飛躍発展させる動きの進み方が遅く感じられる。

外部資金の集め方に工夫が感じられない。

私だけの見方かも知れないが､今回の学内からの学長選考委員の人選には、

亥鼻キャンパス寄りに感じられる。このような委員は全学平等が望ましい。

○　６の国際化に関する事項で「５」の評価をつけたが、昨年度と本年度、国際教養学部の創設によって、８６国立大学法人のなかで、志願者数が第１位を占めたことは、特筆大書に値する。

これらの入学生の期待に反せぬよう、学長、執行部、そして当該学部の学部長・教職員が一致団結して教育・研究に当たられることを、心から期待するものである。

○　学内の組織再編という困難な改革を進めたことは非常に高く評価できる。

・国際教養学部の新設
・工学部 10 学科から１学科への統合

特に、次のようなセンター設置は、千葉大学の強みをさらに強化するものとして評価できる。

・分子キラリティ研究センター
・千葉ヨウ素資源イノベーションセンター
・子どものこころの発達教育研究センター
・グローバル関係融合研究センターの設立（ただし、この名称はまったく魅力がない。外から見て何をするところか分からない)。

２年連続志願者数国立大学１位は、高校、父兄、高校生からの評価が高かった一つの証である。もっと宣伝すべきである。

リーディング研究育成プログラムにより、次世代の科学を進行させる自助努力も高く評価されるべきである。

東京都墨田区と共同で設置する「デザイン・建築スクール」は、千葉大学が、千葉の外に一歩踏み出す事業として､これからも注目したい。

定年退官教員の教育研究への参加についてもガイドラインを設け、明確化した。

附属病院が臨床研究中核病院として認定されたことは、今後の臨床研究を進める上で大きな進展である。個々の教授が独立して行う研究にも目を配り、Diovan 臨床研究のようなことが二度と起こらないようにしてほしい。

学部・附属学校兼任教員制度により、附属学校の大学・県教育委員会の二重構造を解消する方向に動いているのは高く評価できる。

○（１）国際教養学部の創設などグローバル人材育成に積極的に取り組み成果を上げている。
（２）研究の強化に向けた外部資金の獲得に取組み、成果を上げた。
（３）経営戦略会議の創設など機動的大学運営や大学のガバナンス改革にも積極的に取組み成果を上げている。

○　学長として、明確なビジョンを持ち、大学運営にリーダーシップをもって

当たっておられることを高く評価します。
　特に国際化対応に熱心に取組んでおられると思います。
　不祥事が発生したことは残念です。学生に対する自校教育、倫理教育の徹底、教職員の研修のさらなる充実を期待します。

○　学長自らTOKUHISA PLANを策定し、学長のガバナンス強化策を次々と打ち出し、運営組織の改変・整備にあたっている点は高く評価される。
　重点支援③の国立大学としての方針を積極的に示し、学長裁量経費を活用しながら教育研究活動の活性化を行っており、教官及び研究者の士気を鼓舞している点も素晴らしい。その結果、生命科学分野及び理系分野の一部においてきわめて高い研究成果が得られつつあり、外部資金増加にも実証されている。
　医学部附属病院はすでに臨床研究中核病院に認証されていたが、その後の継続的な努力により、さらに「医療法に基づく臨床研究中核病院」として承認を得た。これにより、臨床研究実施にあたっての基盤が確保され、加えて製薬企業などからの外部資金の適正な導入と活用が期待され、特筆に値する。

○　引き続き学内に混乱を起こすことなく、着実に改革を進めておられることは大変素晴らしいと思います。トリプルピーク・チャレンジなどの大学全体としての研究体制整備も進行しており、将来その結果がどのような形で得られるのか楽しみです。
　しかしながら、運営費交付金の削減をはじめとする財政状況の逼迫化に対しては、未だ大胆な対策を打ち出せておらず、学内全体が閉塞感から解放されずにいます。またブランディング戦略を打ち立てているが、広報体制は未だ磐石とは言えず、学生や教職員を対象とした「内向き」の広報の拡充も喫緊の課題と考えます。

○１）全学の教育機能の強化を目的とする「国際未来教育基幹」および世界水準の研究の推進を目的とする「グローバルプロミネント研究基幹」を設置し、自ら基幹長として率いることによって、本学のガバナンス機能の一層の強化に努めている。（２．大学運営、３．教育、４．研究）。
２）国際教養学部を開設し、グローバル人材の育成に尽力している。平成２９年度入試の志願者倍率も初年度に引き続き高いレベルを維持している（２．大学運営、６．国際化）。
３）ＵＣＳＤと共同して次世代型粘膜ワクチンの開発を目指す「千葉大学－ＵＣＳＤ国際粘膜免疫・アレルギー治療学研究センター」を設置した（２．大学運営、６．国際化）。
４）平成２９年度一般入試の志願者数が２年連続で国立大学１位になった（３．教育）。
５）文部科学省の「平成２８年度地域科学技術実証拠点整備事業」に採択さ

れ、「千葉ヨウ素資源イノベーションセンター」設立が認められた（４．研究）。

６）「クリエイティブ・コミュニティ創成拠点・千葉大学」が地方創生推進事業委員会による平成２８年度評価においてＳ評価を受けた（５．社会連携・社会貢献）。

７）千葉大学ベルリンキャンパスやシンシナティ大学での千葉大学国際交流センターなど、海外キャンパス等の設置を行った（６．国際化）。

８）附属病院が国立大学病院では６施設目となる臨床研究中核病院に認定された（７．附属病院）。

９）本学の情報セキュリティ強化のため、Ｃ－ＣＳＩＲＴを発足させた（９．その他）。

○　学長のガバナンス強化という観点では、特に優れた運営を行っている。大規模大学を運営するに相応しい組織を整備するとともに、千葉大学全体の利益を常に考慮している点は高く評価することができる。

○　基本方針として示した TOKUHISA PLAN は明確であり、説得力もある。文部科学省の方針や各部局の状況をとらえて、千葉大学の目指す像を明確にし、それに向けてシステムを構築、説明していくところがすぐれている。

国立大学志願者数や学生の海外留学件数が、国立大学第１位を継続していること、日本学術振興会育志賞や猿橋賞など若手研究者の受賞等、具体的な成果も数多くあげている。

資金確保については、ファンドレーザーの雇用による SEEDS 基金の獲得や、獲得に向けた関係性の構築などの取り組みが評価できる。

情報セキュリティーの強化が確実に図られてきたことは評価できる。

○　運営費交付金が減少する中、いろいろな取組を進めており大学運営に関しては期待を上回る業績といえる。亥鼻キャンパス関連部局の概算要求における４億円を超える基幹経費化は高く評価すべきと考える。人文社会科学系教育研究機構、自然科学系教育研究機構が設置されたが、今後具体的活動が期待される。

教育に関して、国際未来教育基幹と国際教養学部の設置が大きな成果と言える。国際教養学部の受験生の人気などは期待を上回る業績である。国際未来教育基幹の実際の活動、特に普遍教育における真の改革、充実を目指してほしい。

研究に関しては、第３群の大学として研究活動の更なる活性化の取組を推進することが必須である。

グローバルプロミネント研究基幹が動き出しており、今後の成果が期待される。新規のグループ研究を育てるリーディング研究育成プログラムの意義は大きいが、採択された研究課題には十分な研究資金のサポートができるよ

う留意することが望まれる。

国際化、附属病院、附属学校ともいくつかの取組を行っておりそれなりの結果が出つつあり、期待を上回る業績といえる。

○　任期の当初から中長期の千葉大学の基本方針として「千葉大学 Vision 2015-2021」を掲げ、そのアクションプランとして「TOKUHISA PLAN 2015-2021」を作成して、大学内のみならず学外に対しても強いメッセージを発信したことは高く評価される。さらに、この基本方針に沿って任期中の3年間に多くの改革や新規取組みを実行した事も特筆に値する。これらの取組みのいくつかからはすでに目に見える成果が着実に上がっている。

特に、中長期基本方針に沿った運営費交付金重点支援③の大学として、国際教養学部の創設による国際化への組織的対応、創設したグローバルプロミネント研究基幹による学内の卓越研究の掘り出し、西千葉の理工系学部大学院の大幅改組などは、実質的に学長の戦略的な取組が実を結びつつある具体的事例である。

また、学生不祥事など危機的な事案への対応も、毅然としてバランスを保った対応であったと評価できる。

【その他のコメント】p7～p8

○　先の不祥事件について。斯くなる事件の抑止は個人の尊厳が絶対不可侵なることをたゆむことなくすべての者の意識に植え続けることである。いきとしいけるものをいとおしむ、そのいぶきに安堵する、この感性の涵養である。洋の東西を問わず古典として残るものは究極において個人の尊厳を教えていると思う。そのためにも千葉大学には倫理学はもとよりひろく人文学の分野の活力に常に御配慮頂きたい。この事件が驚きであり悲しみであったのは、千葉大学に奉職する多くの方々と出会うことができて、ついぞこのような感性を欠いているなと感じたことがなかったからである。常に思いやりの雰囲気である。これの維持にも大学全教職者のたゆむことのない切磋琢磨が必要なのであろう。

○　全体としては、すばらしい働きである。
　千葉大学に対する愛を感じられる。
　出来るだけコミュニケーションの機会を取り、広く人の意見を聞く姿勢を感じる。
　これからの４年で
・重点支援③
・国際人の育成
・墨田キャンパスの成功
　に力をそそいで下さい。

○　昨年３月には、少女誘拐事件、また昨年９月には、集団暴行事件という不名誉な事件が勃発したが、大学執行部としては、迅速な対応を行ったと思っている。
　入学生、在学生に対する様々な倫理、道徳教育をカリキュラムに組み入れ、実施することが何よりも重要であろうと考える。

○　副学長を倍増させ，執行部を強化し、さらに運営会議を週２回行うなど大学運営面は強化されたが、そのため、有為の人材の研究と教育に関わる時間が割かれることは，大学にとって大きなマイナスになりかねないことを危惧する。
　学長のリーダーシップの下、次々と改革が進んでいる。しかし、その一方で、ボトムアップ的な活動にも目を配って欲しい。
　２年連続志願者数１位の影で，学生不祥事、それも世間のひんしゅくをかうような重大事例が２年連続であった。対策として，倫理教育、ボランティア教育などを上げているが、重要なのは、人間と社会への理解を深めることである。このため、教養教育にさらに力を入れるべきである。教養教育については、ともすると、専門学部の教員の理解を得られないことがあるが、全学的な意識改革が必要である。

○　TOKUHISA PLAN 及び重点支援③の方針は、すべての分野及び学科に浸透しているとは言えない点もあり、さらなる徹底が望まれる。

　組織改編・整備に頻回に行われており、組織の活性化が期待される一方で、事務組織を始めとする混乱も起こりかねず、中間評価の実施・徹底が必要である。

　大学のグローバリゼーションのためには、常勤職員の海外留学などの機会を増やすことも検討すべきである。

　医学部学生、附属病院研修医による不祥事を繰り返さないために、原因究明と倫理教育の徹底が望まれる。

○　千葉大学はここ数年、厳しい経営状態が続いている。国際未来教育基幹やグローバルプロミネント研究基幹といった新たな仕掛けの経済効果が現れるのは、早くて５～６年先の事であろうと思われる。本学の経営の健全化に向けて、学長自らが率先して外部資金の獲得に迅速に動いて頂けることを強く期待する。

○　国立大学の運営費交付金が削減され、千葉大学の財政の硬直化も顕著である。この状況に対しては、千葉大学の自助努力では限界があり、国立大学協会等を通じたさらなる政治への働きかけが必要である。その点でも、イニシアチブを発揮していただくことを期待する。

○　倫理教育は今後さらに重要になるが、倫理に反することはしないという教育だけでなく、個人が身をおく生活の場で、どのような状況（ストレスが高い、時間的な制約がある、成果を求められる、信念が強い、文化的背景・・）が倫理的課題を生じさせるのかといった、より踏み込んだ内容を加えていくことが必要と考える。

○　決算はここ３年連続の赤字と聞いており、研究活動の更なる活性化による外部資金獲得のための重点的取組が望まれる。

○　学長からの業績調書に記載された取組みのいくつかは始まったばかりのものもあり、今後の成果が期待される。その成果を最大化するためにも学内の個別の事情を考慮したきめ細かな対応と調整が求められよう。特に、大学の根幹として、様々な意味での多様性の担保は必須である。また、運営費交付金が逼迫する中で、人事院勧告などを思量すると人件費資源が減少することも明白である。これらの対応に今後の学長のリーダーシップが問われるところである。